2022年6月5日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書7章31～37節
説教題：神を讃美する理由

本聖日は、ペンテコステを記念する礼拝です。私は「AD」というイギリスの映画(テレビドラマ)が大好きで時々ビデオを見ます。隠れ家に隠れていた弟子達のところに聖霊が降って来られた時、弟子達は「ハレール」と讃美しながら、神殿に行くのです。そしてそこでペテロが、喜びと力に溢れて人々にイエス様の復活を語るのです。感動的な場面ですが、「AD」によれば、ペンテコステの時、弟子達はまず讃美するのです。讃美は力です。「詩篇」に「あなたは…賛美を住まいとしておられます」(詩篇22:3)とあります。だから私達は讃美の中で神様に触れることが出来るのです。

ある時、インターネットで「アメリカの人が一番好きな讃美歌は何か」というページに出会いました。と言っても40年前の調査ですが…。ある調査によると、それは「輝く日を仰ぐとき」だそうです。英語のタイトルは「How Great Thou Art」、「あなたは何と素晴らしい方でしょう」です。カナダにいる時、時々地元のメノナイト教会と合同礼拝を捧げました。ある時の礼拝で、最後に「輝く日を仰ぐ時」を歌いました。ある人は手が上がる、ある人は体を揺らす、皆が心からこの歌を讃美していました。それを見ていて、「わが霊、いざ讃えよ、大いなる御神を」と心から歌えることの喜びを思いました。「神様は素晴らしい」と歌えること、それは特権だと思いますが、なぜ私達は「神は素晴らしい」と讃美するのでしょうか。今日の37節で、人々は主を讃美しています。そのこともあり、この個所は、「なぜ私達は神様を讃美するのか」、その一端を確認させてくれる、そのような個所です。2つのことをお話しします。

1：主を讃美する理由～主が私達の信仰を顧みて下さるから

前回は、イエスがツロに行かれ、そこで1人の女の求めに応じて彼女の幼い娘を癒された、という出来事から学びました。異邦人であるフェニキヤの女の「飽くまでも謙遜な、しかしどこまでもイエス様を信頼してイエス様に迫るような信仰」を、イエスは喜ばれました。31節に「それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通って、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に来られた」(31)とあります。イエス様は、ツロからシドンに行き、そこからガリラヤ湖の遥か向こう側を回ってガリラヤ湖畔に帰って来ておられます。「デカポリス」、ギリシャ語で「10の町」という意味です。ガリラヤ湖の東岸、異邦人の地です。そこで人々がイエス様の所へ「耳が聞こえず、口のきけない人」を連れて来て、「手を置いて癒して下さい」と願うのです。

イエス様は、ガリラヤへ帰って来るのに大変な大回りをしておられます。真っ直ぐ帰って来た方が遥かに近かったのです。なぜ、こんな大回りをされたのでしょうか。しかもガリラヤ湖に帰って来るのに、なぜわざわざ異邦人の地デカポリスを通るようにして帰って来られたのでしょうか。そして異邦人の地デカポリスに来られた時、なぜ人々はイエス様の所に病人を連れて来たのでしょうか。

イエス様の通られたルート、それはガリラヤの中心地―(カペナウム等の町場)―から見ればいわば辺境地です。「この辺りにはそんな評判の先生は来て下さらないだろう」と人々が思っていたような地域をイエス様は訪ねて下ったということです。しかも異邦人の地域です。なぜイエス様はそうされたのでしょうか。ある学者は言います。「イエス様に、異邦人の地域、しかもこのような辺境地へと足を向けさせたのはスロ・フェニキュヤの女の信仰だった」。イエス様は、異邦人の女性の中に驚くような信仰を見出され、そしてご自分の伝道の思いを異邦人に、しかも辺境の地に向けられた、と言うのです。そして「なぜデカポリスを通ってガリラヤ湖畔に帰って来られたのか」ということですが…。5章でイエス様は、悪霊に憑かれたゲラサ人の男を癒しておられます。この「ゲラサ人の地方」というのはデカポリスにあります。5章に「彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた」(5:20)とあります。イエス様は、やはり異邦人である彼の信仰に期待して、そして彼が宣べ伝えているであろう地

域へ行こうとされたのではないでしょうか。そして事実、彼は信仰に生きいていた、イエス様を宣べ伝えることに生きていたのです。ここで「耳が聞こえず、口のきけない人」をイエス様の所へ連れて来た人の 1 人は、悪霊を追い出してもらった彼だったかも知れません。そしてその「耳が聞こえず、口のきけない人」も、また癒されるのです。本来「神の民」ではない異邦人の人々の信仰、それがイエス様を動かしているのです。

ある学者は、「この旅には 8 か月が掛かっただろう」と言います。少し長く考え過ぎではないかと、私は思いますが、とにかく、そんな旅をさせてまで、彼らの信仰がイエス様にこのルートを取らせたのです。イエス様を動かしたのです。それはつまり、私達の信仰が、イエス様を—(神様を)—動かすということではないでしょうか。いや私達の小さな信仰を、主は顧みて下さるということではないでしょうか。

そして、神の業を受け止めるためにも、信仰は大切です。「耳が聞こえず、口のきけない人」が連れて来られた時、イエス様は彼を群集から連れ出されます。彼が、イエス様と 1 対 1 で向かい合うためです。そして「その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。そして、天を見上げ、深く嘆息して、その人に『エパタ』すなわち、『開け』と言われた」(33～34)。なぜこんなことをされたのでしょうか。イエス様のしようとしておられることが、彼にも分かるためです。当時の人々は「唾には人を癒す力がある」と思っていました。だから唾も使われた。祝福は天から来ることを分からせようともなさった。要するに「イエス様が癒そうとされる」、彼の中にそれに応える—(受け止める)—信仰の決断が必要だったのです。そして彼がイエス様の御業を—(それがどんなに小さなものでも)—信仰を持って受け止めた時、彼は癒されるのです。

いずれにしても、私達が信仰を持って生きること、また信仰を持って祈ること、「悪霊を追い出して頂いた人」が「耳が聞こえず、口のきけない人」をイエス様の所に連れて来たとすれば、そのように誰かのために心を砕いて執り成すこと、それを神は喜ばれ、私達の願いに—(心の思いに)—耳を傾けて下さり、「こんな所には、イエス様は来て下さらないだろう」と思うような所に来て下さり、私達の願いに動いて下さるのです。

私はしばらく前、結石で苦しんだのですが、私のような者のために、多くの方々が祈って下さいました。本当に感謝でした。そして神様は、その方々の祈りに答えて、私のような者も顧みて下さり、その日の昼には私を痛みから解放して下さいました。翌日、泌尿器科でレントゲンを撮ったら、痛みの原因であった尿管結石がしっかり写っていました。1 週間分の薬をもらい、1 週間後にまたレントゲンを撮って頂いたら、尿管結石が消えていました。自分では、石が出たことに気づきませんでした。盲腸の時と同じように、祈って頂ける中に生かされていることの大きな恵みを思いました。もちろん、祈ったことが祈った通りにならないことも多いでしょう。しかし神様は、私達にやがて分かるように、深いお考えをもって祈りを取り扱って下さることを経験させて頂くことも多いのではないでしょうか。

いずれにしても、私達は自分の信仰を、祈りを、信仰の業を、過小評価してはいけないと思います。「私の信仰生活が、小さな祈りが、何になる」と思ってはいけない。主は、それを顧みて下さるのです。神の時に神の業をなして下さるのです。だからこそ、私達は、主を讃美するのです。

2：主を賛美する理由～主は私達を回復して下さるから

しかしこの個所は「私達がそのような点—(神に祈りを聞いて頂く、御業を為して頂く)—だけを見て信仰を理解することを、神は『良し』とされない」ということも教えます。人々は癒しを見て驚きます、喜びます。そして「この方のなさったことはみなすばらしい…」(37)と言い始めます。「素晴らしい」、これは単なる驚きの言葉ではありません。申し上げた通り、讃美する言葉です。癒された彼も、この讃美に加わったでしょう。彼は舌が解けた時、「イエス様は素晴らしい」とイエス様を讃美出来るようになったのです。しかしイエス様を讃美しようとする人々の思いを制するかのよう

に、イエス様は「このことをだれにも言ってはならない」(36)と口止めをされます。なぜ、この素晴らしい出来事を言ってはいけないのか。逆に言うと、これは「私達は、何を語らなければならないのか。何に目を留めなければならないのか、何の故に『主は素晴らしい』と言うのか」ということです。

申しあげたように、神は私達の信仰を顧みて下さいます。しかし、これも申し上げた通り、祈ったことが祈った通りにならないこともあります。癒されないこともあります。では「救い」はないのか。「癒し」とは、「救い」とは、「福音」とは何でしょうか。もちろん病気が癒されれば素晴らしいです。だから私達も祈ります。一生懸命祈ります。しかし「救い」というものが、もし「肉体的な癒し」だけなら、イエスは口止めをされなかったと思います。しかし、もし「肉体の癒し」だけなら、私達は必ずいつか死ぬわけですから、最後には皆が「救い」に絶望して人生を閉じなければならなくなります。そうではないのです。

ここで人々が讃美している「この方のなさったことは、みなすばらしい…」(37)の「すばらしい」という言葉は、ギリシャ語「カロース」という言葉の訳です。紀元前 300 年に「ヘブル語旧約聖書」がギリシャ語に翻訳されました。「七十人訳聖書」と言います。その聖書の中で、天地創造が終わった時の言葉、「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった…」(創世記 1:31)の「非常によかった」という言葉に「カロース」が使われているそうです。人間というのは、本来素晴らしく造られたのです。しかし、その人間に罪が入り込むことによって素晴らしくなくなったのです。問題の中を生き、神の栄光を表すことが出来なくなったのです。先日、召天された兄弟が証しの時、「人は罪を犯さずには生きて行けないのですよ」と言われました。魂の叫びだと思いました。私達の苦しみの原因は、ある面で人の―(誰かの、私の)―罪に帰着することも多いのではないでしょうか。

しかし私達には、私達の罪を、私達以上に悲しんで、だから私達の罪を背負って十字架に掛かって下さった方がおられるのです。イエス様が私の代わりに死んで下さったので―(罪の始末をして下さったので)、イエス様を信じることによって私達は、神の御手の中に迎えられるのです。もちろん人間的には―(生きる現実においては)、問題に悩み、苦しみ、傷つき、自分の人生を肯定的に見ることが出来ないこともあります。それも現実です。しかし、それが「全て」とはならないのです。神の御手の中に回復されることによって、色々な問題に悩みながらも、私達は、自分の中に「かつて神が『良かった』」と言われた「良きもの」を見ることが出来るようになったのです。どういう「良きもの」が見えるのでしょうか。

カナダで「メノナイトの歴史を考えるセミナー」に参加したことがあります。メノナイトは、宗教改革の中で生まれますが、生まれると同時に迫害が始まり、それもあってヨーロッパを流れ流れて、ある人々は今のウクライナにたどり着きます。「たどり着く」と言うより、メノナイトは「優秀な農民」としても知られていましたので、時のロシア政府から招かれて、移住して行くのです。そこで、彼らはロシア政府から与えられた土地に「自分達の植民地」を作って住み、勤勉に励み、農業で成功して、黄金期を迎えます。ところが時代が下って、ロシア革命の混乱に直面します。メノナイトは、歴史的に皇帝の庇護下にいて、農業で成功していました。さらにロシアにいながらドイツ語を使い続けていたということもあり、混乱の中で迫害の対象になるのです。大変な苦しみを経験します。しかし、その中で彼らは神様に問うのです。「神様、私達はどうしてこのような苦しみに逢うのでしょうか」。その必死の問いの中で、1 つの答を受け取るのです。それは、メノナイト―(アナバプテスト)―は元々「全ての人が幼児洗礼を受けたクリスチャンである世界」で伝道を始めた人々です。「ところが、自分達はロシアに来て、自分達の世界で平和に豊かに暮らすことだけを考えて来た。100 年以上、外の人々に伝道をして来なかったではないか―(政府の方針で出来なかったのですが)。自分達が今出来ることは―(変えることがあるとしたら)―伝道をすることではないか」。そこから「メノナイトの外の人への伝道」が始まるのです。そして、その延長線上に、北米メノナイトの「日本

伝道」もあるのです。私は「自分の信仰は、ロシアで苦難を通った多くの人々の犠牲の上にあるのか」、そう教えてもらった時、自分の信仰を「尊い」と思いました。「決して疎かに考えることは出来ない」と思いました。私が感慨深げにしていたからでしょう、担当の方が私に声を掛けて「あなたの感想を発表しなさい」と言いました。私は、突き上げて来るものに動かされるようにしてそのことを話しました。もっと言うと、私以外の参加者は全員「生まれながらのメノナイト―(内側の人)」ですから、「私こそ、そうやって信仰を伝えてもらった外側の人間です」と「日本で伝道されたことを誇りたいような思い」にもなりました。メノナイトだけでなく、とにかくキリスト信者の背後には、それを伝えるために苦しんだ多くの人々の犠牲があるのです。

しかし私達は、「メノナイトの歴史」を越えて、何よりも「イエス様の十字架と復活」に目を向けなければならないと思います。私達は、罪を赦され―(「罪ある自分を隠さなくて良い、繕わなくて良い」、罪あるという事実が赦されている)―神を喜んで、神の眼差しを暖かく感じて、生きるにも死ぬにもこの人生を委ねて、そうやって生きることが出来るようになったのです。「神の御手の中に迎えられる」ということは、私達の人生に「神の回復の力―(恵み)」が働くということです。「百万人の福音」にこんな言葉がありました。「復活信仰は、人々の人生が絶望から希望に代わることを信じる信仰です」。そういう希望を絶えず持ちながら生きることが出来るということです。素晴らしいことだと思います。

私達の人生に見える「良きもの」、「私達の生」にある「良きもの」とは、「私達の人生はイエス様の犠牲の上にある」ということです。「イエス様の犠牲の上にあるから、この人生は尊い」ということです。これは「神の子に死んで頂いた人生」です。「絶望が希望に変わる人生です」。決して疎かにしてはならない。大事に生きなければならない。そう思う時、私達は自分の人生を愛おしく見ることが出来るのではないでしょうか。魂が回復されるのです。そして、自分の人生を主に在って愛おしく見ることが出来る時に、誰かの人生をもまた愛おしく見ることが出来るのではないかと思います。だから「あの人の人生にも神に入ってもらいたい。あの人の傍らにイエス様が来て下さることによって、何かが変わるのに…」と私達は思います。ここで口のきけない人が話せるようになったように、私達も神の恵みを思い、神の恵みを語ることが出来るようになったのです。いずれにしても、神様は、私達の人生に「良いもの」を回復して下さるのです。これからも回復して下さるのです。だから私達は讃美するのです。

3：終わりに

「第 2 讃美歌 161 番」5 節は「間もなく主イエスは来り、我らを迎え給わん、いかなる喜びの日ぞ、いかなる栄えの日ぞ。(だから)我が霊、いざ称えよ、聖なる御神を」と歌います。私達の人生には、これからも色々なことがあるでしょう。でも私達には「イエス様にお会いして、『よくやった』と言って頂いて、イエス様と一緒に全てのことを感謝して喜ぶ」というゴールが待っているのです。そのゴールに向かって、備えられた道を「讃美しながら」歩いて行きましょう。